写真提供:共同通信社

東京五輪聖火台が川口に里帰り

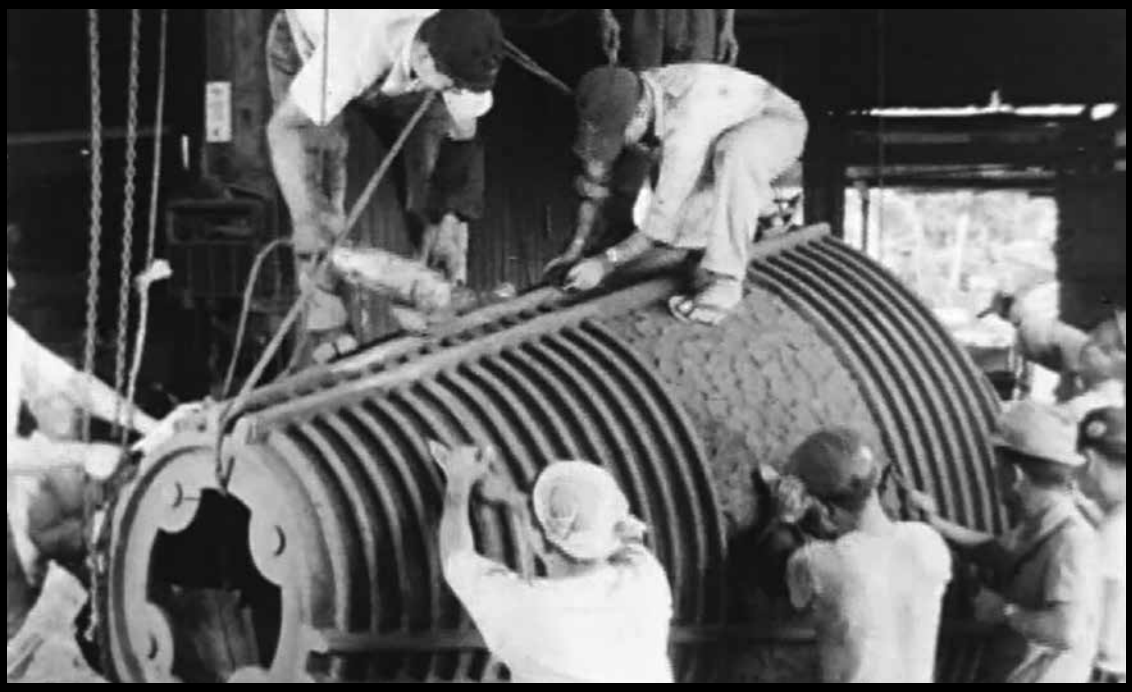
1964年東京五輪では戦後復興の象徴として、
2015年からは東日本大震災からの復興の象徴として、
多くの人々に希望を与えてきた聖火台が61年ぶりに川口へ帰ってきました。
聖火台はキュポ・ラ広場に展示され、10月6日(日)に記念式典を開催します。

川口鋳物師が命を懸けた聖火台

1958年、東京へのオリンピック招致が懸かったアジア競技大会(第3回東京大会)の聖火台制作にあたって、鋳物のまちとして名を馳せていた川口市が重責を担うこととなりました。納期わずか3カ月という依頼に辞退者が相次ぐ中、生涯最後の仕事と鈴木萬之助氏が引き受けたのです。そして、三男の文吾氏とともに心血を注ぎ鋳型を完成させました。ところが、溶かした鉄を流し入れる湯入れの作業中に鋳型が爆発。破損した部分から鉄が流れ出てしまいました。失敗のショックで萬之助氏は倒れ、そのまま亡くなってしまったのです。しかし、父の意志を継いだ文吾氏が、兄弟や仲間の鋳物師の力を借りて、不眠不休で聖火台を完成。その6年後の東京五輪でも聖火をともしました。

この聖火台は、旧国立競技場の解体に伴い、東日本大震災からの復興のシンボルとして被災地を巡っていましたが、誕生の地である川口市へ里帰りしました。

鈴木萬之助氏(右)と文吾氏



鈴木萬之助氏の死後、連日夜中まで鋳型づくりに取り組む文吾氏。文吾氏が完成させた聖火台には父の名「鈴萬」が刻まれている。

父の失敗、そのとき鈴木家は

親父はショックによる心労で寝込んでしまい、既に納期まで1カ月を切っている状態。兄貴は責任を感じ、もう一度失敗したら死んで償うとまで言っていました。

その後兄貴は何かにとりつかれたように文字通り不眠不休で作業に没頭。市内の職人の皆さんの協力もあり、期日までに聖火台の完成にこぎつけました。その後、納品先である長野の善光寺で東京五輪の開会式を見ていた兄貴は、聖火台への点火の瞬間泣いていたみたいです。

東京五輪その後も

やはり兄貴は聖火台に深い思い入れがあったようで、東京五輪が終わった後、毎年10月10日ごろに旧国立競技場へ聖火台を磨きに行っていました。兄貴にとっては親父の墓参りだったんじゃないかな。

今回、親父と兄貴が命を懸けてつくった聖火台が61年ぶりに川口に帰ってくるということで、とても楽しみにしています。市民の皆さんにも「お帰りなさい」と温かく迎えてもらえれば嬉しいです。

当時を振り返る鈴木昭重氏（鈴木文吾氏の弟）

旧国立競技場の炬火台（1964年東京大会の聖火台）設置記念式典

川口市で制作された東京五輪聖火台の里帰りを記念し、式典を開催

日時 10月6日(日) 9:30～11:00

会場 川口駅東口公共広場(キュポ・ラ広場)

タイムスケジュール

9:30 旧国立競技場の炬火台磨き

10:10 旧国立競技場の炬火台設置記念式典

点火式、アトラクション（初午太鼓）など

問い合わせ…スポーツ課 ☎048-259-7657 FAX048-258-3400

式典終了後 開催

市民コンサート ～コカリナの調べ～

旧国立競技場の伐採木から作られた楽器「コカリナ」の優しい音色をお楽しみください。

問い合わせ…文化推進室

☎048-258-1116 FAX048-240-0525